

現代文学秀作シリーズ

大地と星輝く天の子

小田実

大地と星輝く天の子

小田 実



講談社



大地と星輝く天の子

昭和45年11月20日 第1刷発行

著者 小田実

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21／郵便番号112

電話東京(942) 1111(大代表)

振替東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 560円

© Makoto Oda 1970, Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

0393-134552-2253(0) (文1)

目次

第一部 鳥とネズミとカエルと矢と

第二部 裁判

第三部 死まで

解説 開高健

381

245

169

5

装 幀 大沢 昌助
卷頭写真 野上 透

大地と星輝く天の子

第一部

鳥とネズミとカエルと矢と

第一章

「ああ、若僧が歩いて行くな」

ケバロスはひとり言を言った。たしかに、その「ああ」という感嘆詞にふさわしい若者が、彼の卓子のまえをのろのろと過ぎて行く。右から左。左から右。ひとりの場合もある。群をなして、何やら傍若無人に大声で喚きたてて行くときもある。彼らの派手な服装が眼にチカチカする。アテナイの太陽は、真冬といえどもきつい。乾ききった大地に白く輝き、燃え、その白いずんべらぼうの照り返しのなかを、若者たちの原色が動く。白い着物を着ているのは数えるほどだ。たいていが黒、紫、青。なかには赤いのを着ているのもしばしば、肩の上になだてな短外套をひっかけているものもある。それに靴は、誰も彼もが、阿呆のようにおきまりのラコニア靴だ。真赤な靴。あんな靴は、昔は女でも履かなかつただろう。

そして、歩き方だ。

あれはたしかに何か目的を持った足どりではない。ここ

はアゴラだ。ベルシア人やスバルタ人なら、嘘つきとダボラ吹きと浮浪人の巢窟だと言下に断定するだろう、そのアゴラだ。人は、ここへ来れば誰だって、あの変人ソクラテスでさえが、幾分そんな足どりになる。しかし、昔には、もう少し何かがあったような気がする。いつだったか、あれはソクラテスではなかったろう、ソクラテスにかぶれた馬鹿者であったにちがいない、アゴラの片隅で禿頭をふりふり、初老の男が中庸の美德について説いていた。「歩き方においても……」彼は聴衆（と言っても、聴いていた閑人はわずかに五、六人だったろう）をぐるりと見渡し、おもむろに聖なる大地に唾を吐きつけてからつづけた。「紳士は中庸を重んじなければいかん。いいですかね、速からず遅からず、ゆったりとして、しかも気取ってはいかんのです」演説のあとで、彼は自分でその中庸の歩き方なるものを実演してみせてくれたのだが、彼のそれは、まるで真冬のアクロポリスに群れる飢えたる鳥のように貧寒な感じがした。正視できたしろものではない。彼もまた、口では往時のアテナイの栄光をしのび、その現状を嘆き怒り叱咤しながら、彼の内部では、すでに過去のアテナイは音をたてて崩れ落ちてしまっている、そうした情ない男たちの一人なのである。スバルタ軍の占領下、アテナイ市民は、彼らの過去の栄光の象徴の一つであったアテナイ・ペライエウス間の長壁が打ちこわされるのを目撃しなければならなかったのだが、その作業が立ちこめさせた砂埃の

なかで、市民の誇りと自信は、長壁そのものとともに音をたてて崩れて行ったのにちがいない。そのとき、その男も、そこに、その灰色の埃の煙のなかに、いたのだろうか。つまり、すべては崩れ落ちてしまったのだ。「若僧」ど

ことを述べたてるのは、「若僧」どものうちでも、ごく一部の年かきな連中だけだろう。大部分は、そんなことすべてを忘れ去っているように見える。いや、もどから、彼らは何一つ知っていないのだ。

もは、今、いったい、何を考えているのだろうか。彼らはケバロスの卓子のまえを過ぎ去る。まるで何事ももたらなかったように。三十年にわたるスバルタとの大戦争、ペロボンネソス戦争がアテナイの大敗北で終わった、その終わったのがわずか四年前のことであるというのに。そのあと、スバルタ軍の占領があり、占領軍の威勢をかさにきた「三十人政權」の暴政があり、多くの人間が殺され、内乱が起り、ようやくのことで民主政治がとり戻された、それらすべてから、まだほんのわずかしが時日が経過していないというのに——実際、彼らは何事もなかったようにケバロスの卓子のまえを過ぎ去って行く。だらけた姿勢。目的のない足どり。老人たちは怒っている。嘆き悲しんでいる。しかし、その老人たちの怒り、嘆き、悲しみは、「若僧」どもにはたして通じているのか。いや、彼らは逆に老人たちに食ってかかる。戦争中、あなたがたは何をしていたのかね。民会で喚きたただけじゃないか。たとえば情けないこの大敗北をもたらしただけじゃないか。たの無謀・無思慮なシケリア大遠征にあるのだが、それを決めたのは誰だったろう。あなたがた老人が、あの寝返り大将アルキピアデスを指揮官に選び、彼を万歳の叫びで送り出した。いや、こんなふうな

とは言っても、ケバロスは、そうした「若僧」、あるいはもっと正確に言うと、そうした「若僧」の出現という社会現象を、心の底から嘆き悲しんでいるのではなかった。

まして怒っているのでもない。彼はシリア生れの在留外人だった。それにすぎなかった。彼がアテナイの土地に來てからもうかれこれ三十年は経つのだが、しよせん、アテナイは彼にとって「外国」であつた。嘆き、悲しみ、怒りは、アテナイ市民のご老人がたに任せておけばよい。彼はそれよりも、金儲けに精を出すべきであらう。誰もが彼にそれを期待し、それ以外のことを期待していないのだから。

ケバロスは銀行家であり、同時にまた事業家でもあつた。銀行家としては、彼は、遠くエリュトウラ海へ貿易船隊をしたてて大儲けを企む船主に巨額の資金を貸したこともある、れば、夫に死に別れてアゴラで花売り女にならうとする、三人の子持の健気な未亡人にわずかな金を用立ててやったこともある。事業家としてのケバロスはもっぱら貿易商人だった。たとえば、彼の生まれ故郷シリアからの荷を積んで、ひと月に平均三隻、彼の持舟がフェニキアのシドンからベイライエウスの港に帰って来る。

こういう銀行家にして事業家である男が瘦せさらばえて

いたらかっこうがつかないのにちがいない。ケバロスはその貫禄にふさわしく、小兵ではあったがゆったりと肥えていて、何事が起こっても動じないふうに見えた。アテナイがどのようになろうと、ケバロスはひとり変らず、アゴラのこの一角に銀行業務の卓子をかまえて、金色に燦然と輝くダレイコス金貨を入念に数え上げていることだろう。相変らず「若僧」どもはケバロスの卓子のまえを右から左、左から右へ過ぎて行つたが、もはや、ケバロスは彼らに注意を払ってはいなかった。客が来て、彼はすでに商談に熱中していたのである。

アゴラは、今が人の出盛りであつた。ことに、露店市のあたり、身動きできない。

いろいろな店があつた。カリクレスとケルドンはゆっくり見て歩いた。先ずソーセージ屋がさまざまな種類の腸詰のたぐいを、大きなゴザの上にひろげている。カリクレスの猪首のように太いのがあつた。心なしか曲つてゐる。彼の皮膚のようにどす黒いのもあつた。ケルドンのすんなりした脚のように、細くて長いのもある。

「なかみは犬の肉かね」

ケルドンは悪態をついた。

「このど阿呆め、何をぬかす」

ソーセージ屋は彼をにらんだ。いやに瘦せた男だつた。

眼つきが異様に鋭く、おまけに頬に切り傷があつた。ケルドンは平気だつた。さつさと歩き始め、平然と口笛を吹いた。大ディオニシアの祭のときの旋舞歌を自分勝手につくり直したものだろう、カリクレスは、旋律が軽やかに出て来る彼の薄い唇を眺めた。唇はまるで女のようにやさしく紅いのだが、そこからは旋律も出れば悪態も出た。さつきケラメイコスの彼の店にいつものように「今日は」とも何も言わないでのもつさり姿を現わしたときも、彼一流の悪態をついた。

カリクレスは靴屋だつた。ケルドンのように遊び暮していいいご身分ではない。明後日までポイニクスの嫁御のために注文靴を一足仕上げる必要があつた。彼女はまだで口から先に生まれたような女だ。ちよつとの落度でもこまめに発見して、それを値引きのかけ引きの材料にするだろう。カリクレスは朝早くから戸棚の皮革の束を取り出して、一枚一枚、念を入れて検討していた。そこへケルドンが姿を現わしたのである。カリクレスは、早速、彼にむかつて「あの女は象の皮でつくつた靴が似合うね」と冗談口を叩いた。「それはわるくない考えだ」ケルドンは、それが癖の大人びた表情でしたり顔にうなずいた。「しかし、ぼくはそれより人間の皮でつくつた靴を履いてみたいな」「誰の皮かね」カリクレスは何気なく訊ねた。ケルドンはしばらく彼を見てから、さりげない口調で答えた。「あなたの皮だよ」悪い冗談だつた。しかも、そうしたことばを、ケルドン

はいつも虫も殺さないようなあどけない表情で言っている。そのたびごとにカリクレスは焦らだつ。いや、彼はケルドンとともにいるだけで、ときとしてどうしようもない焦らだちにとらえられるのだが、彼の風貌のどこにそれを感じさせるところがあるのか。眉目秀麗、見るからに上流階級の子弟然としていて、気品、落ちつきにも欠けてはいない。彼はすでに十八歳で「少年愛」の対象となるには少しばかり年をとりすぎていたが、少年のお釜を掘ることに熱情を傾けたがる男なら、万金を投じてでも惜しいと思わないうちにがいない。そして、そういう男は、アテナイと言わずスバルタと言わず、全ギリシアにあまりにも数多いのだ。カリクレスの妹婿のバスクレスなどもその典型的な一人だが、彼がケルドンに近づいたのも、裏に魂胆あつてのことであろう。おかげで、カリクレスまでが、この十八歳の貴公子と知己になる光榮に恵まれたのである。

そうは言っても、カリクレスは「少年愛」もしくは「お釜掘り」という、ほとんどギリシア全土に集団的に発生した病氣には感染してはいなかったから、ケルドンの美をかなり客観的に見ていた。たとえば彼の鼻はたしかに立派なギリシア型の鼻だが、その鼻の表面をニキビの跡がかなり濃密にそこなっているとか、彼の眼がかなりな程度に斜視だとか。もっともバスクレスは前者には決して気づかず、後者はケルドンをより魅力的なものにしているものだと言ふことであろう。

「おれは、カリクレス、おじさんが好きなんだよ」

ケルドンは正面からのおじしい視線で彼を見える。

「ほとんど大人の男が少年を愛するようにね」

そして、ニコリともしないで、さらにいっそうぬけぬけとつづける。

「……と言うと、カリクレス、おじさんだってまんざらわるい気がしないだらう」

つまり、それなのだ。ケルドンといると、そんなふうな奇妙な彼のベースにまきこまれて、カリクレスはくたびれ果ててしまうのだ。そうした大人びた言辭を弄したあと、彼は掌のうちにまるめていた甲虫を地面に投げた。甲虫には長い糸がついていた。その糸をつかつて、彼は甲虫を散歩させる。

ケルドンが糸を引くと、甲虫はのろのろ歩いた。どうして彼はいつもこんなものを持ち歩いているのだらう。一匹が死ぬと、新しいのをどこかで見つけ出してくる。「お守りかね」「いいや、玩具だ」そのケルドンの答は、案外、正確なのかも知れない。甲虫の糸を引っぱるとき、彼はお氣に入りの玩具に熱中している子供のように見えた。甲虫がのろのろと動くとき、彼の眼は輝き、動かなくなると、熟練した手さばきで、あるいは強く、あるいは極度に静かに、なだめすかすようにかけ声をかけながら糸を引く。ホウ、ホウホウ……

「氣をつけろよ、このトンチキめ」

カリクレスは大きな籠をかついだ市場の若い衆にぶち当たった。籠にはパンがいっぱい入っていて、危く地面に落ちかかった。逆の方向によろめくとケルドンが袖を引いた。

何という魚か、巨大な魚を右手にぶら下げた老爺がよろめかかって来る。魚の油で、一帳羅の着物を汚されてはたまらないし、懷中物にも用心しておく必要がある。なにしろ、ここは、スリ、かつ払い、置引き、すべての小犯罪の本場であるアゴラなのだ。

「コックはいらんかね」

人の流れのまん中に立って、その流れに一人さからうように立って、まるで小人のようにちんまりした男がどなっていた。住込志願の料理人だろう。彼のことばには訛りがあった。エリスから来たと言いたいのだろう。エリスのコックには定評があった。しかし、ほんとうだろうか。彼はわざと訛りを使ってみせ、それでもって自分をコックに雇ってくれる馬鹿者を待っているのにちがいない。ほんとうは小男はエリスからなのではなくて、きつとアッティカの片田舎からやって来たのだ。どん百姓め。おまえさんには豚の尻尾の匂いしかなないぜ。しかし——ふと、カリクレスは小男が嘲笑したように思った。(おまえさんになつてコックを雇うだけのお金がないのだろう)

ケルドンが笑った。かん高い笑声である。神経にさわった。

「何故、笑う？」

「だって、おかしいもの」

ケルドンは笑いつづけた。

「カリクレス、おじさんは歩きながら眠っているように見えるね」

ケルドンはようやく笑いを止めた。

「それとも、おじさんは眠りながら歩いているのかね。歩きながら眠る。眠りながら歩く。この二つのあいだに横たわる差異は重要だ。そこからすべての論理学は出発する。つまり、どちらに主体性があるかってことだ」

「おれはソフィストは大嫌いだよ」

カリクレスは不機嫌に言った。

「……と言うよりは、ものを考えるってことが大嫌いだと言っただけがいい」

カリクレスはケルドンをにらみつけたが、ケルドンもまた彼を何くわぬ顔で見返した。一発見舞ってやろうか。いや、この少年は一発見舞われたところで、表情一つ変えないのだろう。いわばケルドンは蝶々なのだ。ひらひら、ひらひら、眼のまわりをうるさく飛びはねる。両掌ではさみ込むようにして叩く。死んだ。そう思って、掌を離すと、また、ひらひら、ひらひら。おまけに掌には、蝶の羽の粉がべっとりとくっついて離れないのだ。はたこうが、水で洗おうが、いつまでも執念のようにこびりついて離れない。ケルドンはまた大ディオニシア祭の旋舞歌の旋律を口笛で吹いた。

「あれはウナギだな」

ケルドンがまた唐突に言った。二人は魚市場に入っていた。てまえの店の台の上に、黒い太い紐が並べられていて、その紐はくねくねと曲り、またときどき煙擧した。みごとなウナギだった。台のうしろの若い衆がのべつまくなしにまわしたてた。

「大将、買わんかね。え、このウナギをごろうじろ、ホイオティアはコバイス湖から直送のウナギだ。安くしておくぜ、大将」

ウナギに見とれている男が数人いた。アテナイでは、アゴラの買物はふつう男がする。女や奴隷などという愚かな動物は使わなくて、主人自らが出馬なさるのだ。食糧の買出しという大事なことを、女や奴隷どもに誰が任せておけるだろう。

カリクレスもウナギをみつめた。魚好きのアテナイ市民の例にもれず、彼も魚には目がなかったが、それにしても、高いだろう、とても買ったものでないのにちがいないかった。カリクレスはウナギと、その背後でわめきたてる若い衆から眼をそらし、空を見上げた。馬鹿みたいに空は蒼一色に澄みわたり、太陽の位置から見て、あとしばらくでまひるになるのだろう。

「ウナギはあきらめたほうがいいぜ、カリクレス」

ケルドンがまたまた口をきいた。

「私の手に負えないというのかい。大きにお世話だ。私は

アゴラに買物に来たんじゃない。散歩に来たんだよ」

「あっちのヒラメにしたらいよいよ」

カリクレスのことばにかまわず、ケルドンは頸を反対側にしやぐつてみせた。

「とりたてのヒラメだぜ。あんたがた、こんな新しいのを見たことがないだろう。ペイライエウスから水揚げして来たばかりだ」

二人の姿を目ざとく認めると、ウナギ屋の逆の側に陣どった魚屋がここでもばかでない声を出した。叫びながら、魔法にかかってふくれ上ったようなヒラメの腹を、平手でビシャビシャ叩く。なにがとりたてなものだろう。あの腹の色の変わりぐあい、ぶくぶくぐあいから見て、昨日、いや、一昨日のものにちがいなかった。痩せさらばえたハダシの老婆がかたわらに立っていて、行者のように大地の一点をみつめている。彼女はあのヒラメを買うつもりなのだろう。つまり、誰も買手がつかないのをみきわめてから、おもむろに安く買い叩く。

「このババアめ、あっちへ行きやがれ。こっちは商売やっているんだから。営業妨害で巡査を呼ぶぞ」

魚屋はしつこく毒づいた。老婆は動じる気配もなかった。老婆は奴隷にちがいなかった。安く買い叩いておいて、彼女に財布をあずけた頓馬で怠け者の主人から、小銭をかすめとる。これは賢い奴隷が毎日のようにやっていることだ。カリクレスは自分の家の奴隷のクサンティアスの顔を

思い浮かべた。頬から顎にかけていちめんのまぶさとなヒゲ。彼も老婆のように、ずるをして小金を貯め込んだのにちがひなかった。今では、奴隸仲間はおろか自由市民にまで高利で金を貸しているという噂だ。いつだったか、金を出すから自分の身をあがなって自由の身にして欲しいと酔ったまぎれに言い出したことがある。いや、あれはほんとうに酔っていたのだらうか。酔ったふりをして、こちらの意向を打診してみたのではないか。ひょっとすると、クサンティアスは今ではもう主人のカリクレスより金持なのかも知れなかった。すくなくとも、三オボロス（三オボロスあれば、辛うじて一日が食えた）の日当めあてに、早朝、夜がまだ明けきらないうちから民会、裁判所へ忙しく駆けつけるカリクレスの父親パウサニアスよりは金持なのにちがひない。すでに六十五歳だが、彼より二歳若いパウサニアスより、クサンティアスははるかに若やいで見え、風采があがった。それに反して、あわれなパウサニアスは、いつだって水漬をたらしたらし生きのびているような感じがする。――

「カリクレス、あんなのと寝る気がするかね。百万ドラクマもらうとすると、どうかな」

ケルドンが老婆を見ながら言った。彼女は動かなかった。あれは大地から根が生えているのか、大地震が起きてても、彼女はゆり動きもしないだらう。折れ曲ったような背中。汚ない着物。ひび割れが無数に走るハダシの足。足は奇妙

に小さかった。

「しかし、結局、同じだな。どんな女もあんなふうになる」ケルドンは白い大地に赤いラコニア靴を蹴り立てた。そうしたとき、彼もまたいらだっているように見える。しかし、何にこの貴公子はいらだつことがあるのか。カリクレスはふしぎなものを見る眼で彼をみつめた。彼の金色の長髪、ラコニア靴の真紅、その二つが白い陽光にひらめくようにゆれる。

「きみは女を知っているのかね」

「ある程度はね」

ケルドンはてんたんとして答えた。

「ベイライエウスで寝た」

「何人」

「さあね、三十人ぐらいかな」

カリクレスは、月に一度、アテナイの外港ベイライエウスへ商用で出かける。金のあるときは、帰途、娼家へ寄った。ブラクサゴラ、バスクレイア、パンビレ、シミケ……：腋臭の強い女。尻のところに痣のあった女。最中に大いびきをかいて眠り、すむと、パツチリ眼を開いて「あら、もう終り」とあっさり言っている女。つまりは、ケルドン少年の寝た女もブラクサゴラでありバスクレイアでありパンビレでありシミケであるのだらう。とすると、カリクレスは彼と「何トカ兄弟」の縁につながっているのかも知れない。カリクレスは愉快になり、少年の肩を叩いた。「お

まえさんとおれとは……」

「おじさんは嫁さんを貰うんだってね」

ケルドンは歩き始めながらふと思いついたように言った。

「まあね、話はある」

「三十二歳だから、適齡だな、おじさんは」

カリクレスはうなずいた。

魚市場を抜け出ると、にわかに人出は減った。魚の匂いが消え去り、まひる近い太陽にほどよく温められた大地と建物のひんやりと落ちついた石の匂いが立ちこめて来る。広場のところどころにスズカケの木が立ち、そのみどりの木かげに、さまざまな神像がさまざまな姿態を見せて所在なげに立っていた。神像のかたわらで話し込んでいる人たちがいる。歩きながら話している人もいる。広場を柱廊がいくつかととりまいていて、人々はそこにもいた。前方左方には市会所が見え、さらにその左には「トロス」と呼ばれる円屋根の優雅な建物が見えた。大部分が大理石づくりだったから、建物は、白、というよりは白銀の輝きを放って正視できないほどだ。

「もう相手は決まっているってきいたよ。バッタロスの三番娘キユンノ……どうだ、図星でしょう」

「誰に訊いた？」

「結婚周旋屋のグリュケラだよ」

「グリュケラ？……おまえ、あの女を知っているのか」

思わずカリクレスは立ち止まった。

「アテナイは狭いからね」

ケルドンはゆっくり言った。

「たとえば、アゴラへ来れば誰にでも会える……ほら、あそこに一人の男がいる」

彼は突然背後をふり返った。銀行家の卓子の列が見えた。「あの三つ目の卓子のところに人品いやしからぬ立派な紳士が立っているだろう。ケバロスの卓子のところだ。彼はアテナイの未来を憂えている。青年の墮落を歎いている。みんなのようにね、アゴラでダボラを吹いているみんなのようにね」

ケルドンはひとり言を言うようにつぶけた。そのあいだじゅう、赤いラコニア靴が白い大地を蹴り、金色の長髪がたれ下り、ゆれる。

「ただ、あの紳士がちがうところは、ただ一つ、みんなとちがって真面目に、本当にそうしているってことだ。彼は愛国者だ。人格高潔の士、アテナイ市民の模範。貴族政治を主張する男で、かなり名声がある。弟子というのもしいるくらいだ」

彼はふいにことばを切った。ラコニア靴は動きつづける。紳士はケバロスとしきりに何か話していた。長身瘦軀。こちらに背を向けていて、どこの誰とも判定がつかないのだが、荒野に一本立つオベリスクのように瘦せた体にまとうた白い上衣が、彼をすくなくとも貴族に見せた。風が吹い